

探訪 北の風景 100

開拓期の森が今も残る 北海道大学植物園・札幌市

青木和弘

札幌の中心部に、こんな濃い緑に包まれた心地よい場所があることがうれしい。近年はすっかり足が遠のいていたが、芝生の広場に寝転んで本を読み、飽きると何をしてもなくボーっと過ごした。樹木や草花の名前も知らず、植物学や郷土史への興味もなかったことが、いま思えば惜しまれる。

ここ、北大植物園(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園)の場所は、北海道庁の西側で、JR札幌駅南口から徒歩10分ほどの距離だ。広さは380メートル四方で、札幌市の条丁の区切りでいうと9区画分ほどに相当する。豊平川の扇状地で、大正の終わりとほぼ一致する。豊平川から泉がわき出る場所だった。パンフレットに約1000年前の竪穴式住居跡が3カ所紹介されている。

四季折々楽しめる場所で、明治の開拓期から手つかずの森が残されていたり、メタセコイアやドイトウヒ、アカエゾマツなどの巨木が林立する針葉樹林があったり、ハルニレ(別名・エルム)の巨木が、いたるところで枝を広げている。

北方民族植物標本園には、アイヌ、ニブヒ(ギリヤーク)、ウイルト(オロツコ)民族が利用した植物約200種が植栽展示され、食用、薬用、衣類、住宅、祭祀、狩猟など用途の解説を掲示している。例えば、キンポウゲ科のアカカラマツは北海道から沖縄まで広く分布し、乾燥させて煎じたものを胃腸薬として利用されてきたが、標本園の解説には、アイヌ民族は「種実の香気と味が心を殺すとし、短気な人、気の弱い人、酒ぐせの悪い人、疝(かん)の強い子供などに種実を粥(かゆ)に混ぜて食べさせる」(読み仮名は著者)とある。ヨモギやクマザサなど身近なものもたくさんあるので、「へーえ」とか「ほーお」とか言いながら見て回り飽きることがなかった。北方民族資料室と一緒に見学したいが、新型コロナウイルスの感染防止のための換気が十分に行えないため閉館しているのが残念だ。

そんな調子で、高山植物園や草本分科園、バラ園、温室などを巡っていたら、疲れてきたくなる。水やおやつが必要だ。こうした展示園を中心に巡るコースと、樹木や芝生を巡る林間コースの順路がパンフレットで案内されている。見どころはこれだけでない。施設内にある木造建造物はみな重要文化財で、ほとんどが北大の前



博物館は北海道では最古のもの。建物やガラスケースが重要文化財に指定されている。世界で唯一のエゾオオカミの剥製や、南極観測で活躍した樺太犬タロ、鳥類標本、北海道考古学資料などを展示している。周囲に博物館事務所や博物館倉庫もあり、みな明治期の建造物である

身、札幌農学校時代のものである。特に博物館は1882(明治15)年の完成で、この植物園が1886年開園なので、それよりも古い。どちらもクラーク博士が札幌農学校に必要な施設として唱えていたもので、北海道大学農学部の研究施設として引き継がれている。

博物館には樺太犬タロのはく製が展示されている。1956(昭和31)年の第一次南極観測隊にソリ犬として参加したが、交代要員を乗せた南極観測船宗谷が着岸できず、犬15頭が一年間現地に取り残された。そのうち兄弟犬のタロ、ジロが生き残って発見され、当時、世を沸かせた。ジロはその後、昭和基地で亡くなるが、タロは1961年に帰国し、この博物館で飼育されて天寿をまとうとした。ほかに絶滅したエゾオオカミや、ヒグマ、エゾシカなどの哺乳類や鳥類の剥製や骨、土器や石器、漁労資料や模型などもある。





北ローン（芝）は園内で一番広い芝の広場。ハルニレの林があり、北ヨーロッパ原産のムラサキセイヨウブナやアメリカハナノキ（ベニカエデ）、ブナなどの巨木が枝を大きく広げている。東屋で涼んだり、寝転がったり思い思いの時間を過ごす。芝はケンタッキー・ブルーグラスなどを主とした洋芝で、雪の下でも緑を保ち、雪解けとともに緑が現れる

北方民族植物標本園。なじみの草木もあり、用途の説明を読むだけでも興味深い。約200種類ある



宮部金吾記念館の手前に北海道最古のライラック（中央下）がある。太い幹は根元付近で切られている。

もう一つ、宮部金吾記念館は1901（明治34）年建築の札幌農学校植物学教室で、その後、移築して、園長室、園事務所として長く使用された。そのそばに北海道で一番古く大きなライラックの株がある。1890年ごろ、北星学園大学の創始者であるサラ・スミス女史がアメリカから持参した苗木から育てたもので、この株から札幌のあちこちに分けられたという。最初は温室付近に植えられたが、その後、現在地に移植された。その際、運搬に使ったソリから重たくて下ろせず、ソリごと植え穴に下ろしたらソリが引き上げられず、そのまま埋め込んでしまったという。近くの園路は、世界各地から集めたライラックの並木になっているので初夏にぜひ訪れたい。宮部金吾（1860—1951年）は初代植物園長を務めた植物学者で札幌農学校の二期生。植物園の設立を担った功労者で、同期に内村鑑三や新渡戸稲造らがいる。